

2020年度 教育学部・教職大学院合同ESDフォーラム 基調講演

国際理解・SDGsを取り入れた教育の考え方と実践

—立命館小中高での実践から—

Theory and Practice incorporating International Understanding and SDGs: From the practices
of Ritsumeikan Primary, Junior and Senior High School

堀江 未来 (Miki HORIE)

立命館小学校・中学校・高等学校 代表校長 (Principal, Ritsumeikan Primary
School, Ritsumeikan Junior and Senior High School)

皆さん、おはようございます。堀江未来と申します。今から質疑応答含めて約1時間お時間いただきまして、「国際理解・SDGsを取り入れた教育の考え方と実践：立命館小中高での実践から」ということでお話をしていきたいと思います。

私はもともと、大学の教員として20年くらい、複数の大学で国際教育交流の推進を担ってきた者です。小中高の代表校長を務め始めてから今で4年目ということになります。はじめて学校現場に入って以来、感動することがたくさんあり、学ぶこともたくさんあり、それから予想もしなかった大変な案件にもたくさん出会いました。ということで、最初は何もわからずに始めたような状態だったのですが、4年もやっていると結構いろんなことを経験させていただいています。いろいろありますが、学校現場の仕事というのはやっぱり素晴らしいと思います。子どもたちの成長を支援するというのは本当に素晴らしい仕事だと思いながら日々業務をしているところです。

今日の内容ですけれども、まず初めに少し自己紹介をさせていただき、私がなぜ国際教育をずっとやっているのかということの、バックグラウンドを少しご理解いただきたいと思います。それから、立命館学園と立命館小中高の概要の紹介、3番目に「国際教育」実践を通じての学びとは何か、この学び、「国際教育」実践によって、子どもたちが、学生・生徒がどんな力を身につけているのか、どんな力を身につけてほしいと思っているのかというところの、少し理論的なところをご紹介します。最後に立命館小中高での実践例をお時間の許す限り、お話したいと思っています。皆さん立場が様々だと思いますので、全体を通してどこかお役に立てる話があれば嬉しいです。少しでも皆さんにとって実りある時間になればと思って準備をして参りました。よろしく申し上げます。

まず初めに自己紹介ですが、私は名古屋大学の教育学部に進学をいたしまして、比較教育学を学びました。そのときに今につながるすごく大事な経験をいくつかさせて

もらっています。一つは留学生支援団体の立ち上げです。

当時（1988年）、私は大学一回生でした。留学生十万人計画が進行中というタイミングで、留学生の数はずいぶん増えてきてはいましたが、外国人留学生と日本の学生が交わって一緒に学ぶための場所や取り組みが乏しいために留学生が孤立していたり、日本が非常に物価の高い時代で、生活を成り立たせるのに苦労しながら勉強している留学生が多かったり、という時代でした。

そのときに、本当にたまたまなのですが、中国の南京大学に1年間交換留学生として行くチャンスをいただきました。1990年のことなので、天安門事件の直後ですね。今の中国とは随分違う時代、経済発展以前の中国で、1年間過ごすという経験をさせてもらいました。帰ってきてから、今度は韓国で1ヶ月過ごすというプログラムにも参加をしています。この中国・韓国での経験というものが、私自身が国際教育を考える時のひとつのベースになっています。そういった異文化体験を通じた中で、異文化体験から学んで成長するということはどういうことなのかということに学問的に興味を持つようになりました。そして、そういうことを専門的に勉強できる大学院を探していたのですが、当時の日本にはまだほとんどありませんでした。最終的には、アメリカのミネソタ大学にそういったことを集中的かつ多面的に勉強できる博士課程があることを発見しまして、そこに進学しました。その後は先ほど申し上げた通り、日本に戻った後はずっと国際教育交流に関わる仕事をしております。

現在は、代表校長の仕事、それから立命館大学国際教育推進機構の教授の仕事、これを大体9：1くらいの割合で日々やっています。BRIDGE Instituteという、これは私が有志の仲間と一緒に立ち上げたグループで、国際教育実践に関わる教職員育成のセミナーとか研究を提供しています。その代表も務めております。

R 自己紹介

- ・名古屋大学教育学部・教育学研究科修士課程（比較教育学）
 - ・留学生支援団体の立ち上げ
 - ・交換留学生として中国・南京大学で1年過ごす
 - ・外務省日韓交流プログラムで韓国で1ヶ月過ごす
 - ・アメリカ・ミネソタ大学大学院教育政策行政専攻 博士課程
 - ・「異文化体験から学び、成長するとは？」
 - ・南山大学・名古屋大学を経て 2009年立命館大学へ
 - ・国際教育交流に関わる仕事（受け入れ・派遣・学内交流）
- 現在 立命館小学校・中学校・高等学校 代表校長（2017～）
立命館大学国際教育推進機構 教授
BRIDGE Institute 代表

Beyond Borders

R 探求のはじまり・・・

南京大学での1年間（1990-1991）で得たこと

- ・社会・文化の多様さ。「自分の目に見えること、知っていることだけが全てではない！」
- ・日本人が海外に出るとはどうか、日本人に対する様々な反応。
- ・人間（私？）は結構どこでもやっていける。環境変化はストレスではない。好奇心が強い。「日本では出せない自分も、出せる！」

海外留学の「B面」：日本へのリエントリー
日本ではもうやっていけない・・・
これももう一つの「留学」なのでは？

Beyond Borders



少し自己紹介を掘り下げます。なぜそういう国際教育の探究を始めたのか。それは、先ほど申し上げた通り、南京大学で過ごした1年のインパクトが非常に大きかったです。この右側の写真が当時の中国の様子になります。毎日の生活の中で眼から鱗が落ちることがたくさんあったんですけど、一年間で学んだこと、気

づいたことを要約しますとこの3点になります。

1つ目は社会文化の多様さについて、「自分の目に見えること知っていることは全てではない」ということを思い知ったということです。中国に行く前にはもちろん中国の文化、歴史について多少は勉強して行きましたけれども、そういった情報を、日本で育った私のものの見方でもって読んで理解できたことと、現地に入って現地の人々との交流の中で理解したことはやっぱり違うんですね。見えない部分の理解の幅が全く違っていました。この経験から、私は世界中のことを情報だけ受け取ってわかった気になっているけれど、実は私は何もわかってないんだなということに気づけたことはとても貴重でした。

2つ目は、日本人が海外に出るといえるのはどういうことなのか、ということです。もちろん留学していたのが南京なので、日本に対するいろんな反応があります。おそらく中国の中でも、日本人が住むには一番ハードな場所かもしれないと思うんですけど、この点においてもずいぶん気づきがありました。例えば街を歩いていて、日本人だとわかると罵声を浴びるような経験も、もちろんあります。一方で、養老院に訪問に行ったときにおばあちゃんとお話をする機会があって、「私は日本から来た留学生です」と言うと、そのおばあちゃんが、「ああ、そうですか。私は、私の夫と息子は日本軍に殺されました」とおっしゃるんですね。私はなんと答えていいかわからず、言葉を失っていたら、そのおばあちゃんが「いやいや、あなたがしたことではないし、あなたはこうやって私たちに会いに、この場所に来てくれている人なんだから、あなたが悪く思うことは何もないんだよ」と言ってくれました。とにかく、いろんな過去の歴史に対する解釈と反応が様々あるということを経験できたことは、非常に大きかったなと思います。この後韓国に1ヶ月研修で行った時にも同じように多様な反応を経験しました。そのあと世界中どこに行っても、そういう感性を持って現地の人と接することができるようになったことは、ありがたかったと思っています。

3つ目はですね、「私、結構どこでもやっていけるな」という変な自信ができました。環境変化は自分にとってはストレスではないとわかりました。写真の右側を見ていただくと、ラーメンとか色々書いてあるんですけど、こういう屋台のような、日本とは清潔感の基準の全く異なるレベルのところでご飯を食べたりすることも、ほぼ平気でやっていました。当時の日本の、バブル崩壊直前のちょっと浮かれた社会の中で経験してきたような環境が一切なくても、私やっていけるなって思えたことは自信につながりました。そして、日本の社会で経験したような社会的なプレッシャー、例えば、なんとなく強制される女性らしさのようなものも、当時の中国では一切感じなかったというか、少なくともそういう圧力の外で生きることができました。自分にとってははじめて経験する解放感で、日本では表現を遠慮していた自分、例えばストレートにものを言うとかはっきり自分の意見を示すみたいなことも中国では出すことができ

て、そういう経験は自分にとって意味のあるものでした。

ただ、この1年が終わって日本に帰ってきたとき、今度はものすごく日本に馴染めなくなっていました。留学後にこうした経験をされた方は多いと思います。専門的には「リエントリー」と言われる、自分の文化への最適過程、私は「海外留学のB面」と呼んでいます。経験としてはなかなか大変なものがあります。もともといた、よく知っている場所なのに、そこに変化しきった自分が帰ってくるということで、家族や友達も戸惑うし、自分も何が何だかよくわからない。インターネット以前の世界では、特にこの反応は強く出ていたと思います。ただ、これも後から考えると、もう1つの留学として意味のある体験だったと思いました。ただその時はよくわからないので、さあどうしたものかと思いつつ、悶々としていたときに今の学問に出会ったということになります。

ミネソタ大学には1995年から1998年までいきまして、その後日本に帰ってきて博士論文を書いて、2003年に博士号をいただきました。異文化体験を通じて学び、成長するとはどういうことかというのを政策面と心理面の両方から学びました。それともう1つは、異文化間コミュニケーションのトレーニング方法も学びました。

はじめは英語が全然でできなかったもので、ずいぶん悔しい思いをし続けました。外国語を話そうと思うと中国語が出てきてしまって、英語が一切出てこないようなレベルから始めましたので、切り替えに時間がかかりました。何が悔しいって、議論に参加できないということ。自分が、議論に参加できないことがこんなにも悔しいのかということに改めて認識しましたし、それを乗り越えるという貴重な経験をさせてもらいました。他にも、経済的な自立を知らなければいけないという課題もありましたし、あとは、自分の文化的周辺性を受け入れるということも大きな課題でした。中国で1年過ごしたことで、私は中国のことも一定わかるし日本のことも一定わかる。だけど、どちらの「普通」でもない、どちらでも周辺にいる私。そんなアイデンティティの文化的周辺性は、アメリカでは逆にポジティブに作用しました。私は日本でも中国でも文化的にはメインストリームの人ではないけど、個人としては世界中どこに行ってもやっていけるかもしれない。そういうアイデンティティの変容を経験しました。その流れで、多様な経験を通じて自分らしく成長できる人を支援したい、強みや個性が生かされる教育の支援がしたいと思うようになりました。このときに感じたそういう使命感みたいなものは今にも続いています。

R 国際教育の研究へ

ミネソタ大学 1995-1998, 2003

「異文化体験を通じて学び、成長する」とは？

- ・ 教育の国際化政策
- ・ 教育心理学・発達心理学
- ・ 異文化間コミュニケーション

英語が使えない悔しさ

経済的な自立

自分の「文化的周辺性」を受け入れて



「多様な経験を通じて成長する人を支援したい」

「強みや個性が生かされる教育支援がしたい」

Beyond Borders

このスライドは立命館学園の図です。立命館大学と立命館アジア太平洋大学という、2つの大学が立命館学園の中にあります。この下にぶら下がる形で5つの附属校、立命館小学校と立命館中高、それから立命館宇治中高、立命館慶祥中高、立命館守山中高があります。私はこの左端の立命館小学校・中学校・高等学校に関わっています。立命館小学校と立命館中高は場所も分かれていて、実際は別々に設置された学校になるので、正確にいうと、私は二つの学校の校長を兼任しているということになります。



立命館学園は“Beyond Borders”という言葉掲げていますが、これは非常に学園全体の性格を示していると思います。児童・生徒・学生が自分のボーダーを超えて行く、その後押しをするのが私たちの役割だということです。2020年度からの新しいキャッチフレーズは「挑戦をもっと自由に」ということなんですけれども、これも、私たち大人もちゃんとボーダーを乗り越えて成長を続けましょうということで、失敗を恐れずに新しいことに挑戦していくということが、学園全体のカルチャーとなっています。

立命館小中高のミッションとして「新たな価値を創造し、社会に貢献できるグローバルリーダーの育成」ということを、12年間一貫教育の中で謳っています。この写真は立命館中高の校舎です。子どもたちいろんな服を着ていますけれども、高校生は自由服なので、自分たちで制服的な服を選んで学校にきます。中学生は制服があります。

小学校のでは「学んだ子どもたちが、世界を変えていく」というのがキャッチフレーズになっています。小学校も中高も言いたいことは同じで、しっかり

R 立命館小学校・中学校・高等学校のミッション

「新たな価値を創造し、社会に貢献できる
グローバルリーダーの育成」



学んで世界をポジティブに変えていける人になりましょうということになります。

これは立命館中高の最新のパンフレットです。私の挨拶の中で掲げている3つの学校の教育の目標は、「世の中を良い方向へ導こうとする志」「多様な人のあり方を尊重できる人権意識」「学び続けようとする自己成長力」となっています。この3つをしっかりと、卒業するまでに身につけてもらいましょうというのが学校の目標となっています。

ここまでは学校で私たちがどういう言葉を使って生徒を導こうとしているかという話でしたが、ここで、その根底にある考え方についていくつかご紹介したいと思います。

1つは、未来をどう捉えるか、ということです。私たちは、2030年にむけて教育の形、学校の形っていうのを学園中で議論して、色々な方策を決めて行くというプロセスにあるところです。その前提として、未来をどう捉えるかということは、教育のあり方を考える上ですごく大事なテーマだと思っています。

私自身は、未来をある程度楽観的に捉える必要があるんじゃないかと思っています。近年、急速な社会変化を脅威として捉える論調がよく聞こえてきます。例えば、これから10年後には今存在する仕事の半分がAIにとって代わられるだろうという予測がありますよね。その予測を、「じゃあ、仕事が減ってしまってやばい」と捉えることもできるけど、そう

ではなく、「じゃあ、AIがやる仕事以外に、私たちは新しい仕事を私たちは作っていくんだな」という発想を、子どもたちにはもってほしいと思っています。社会変化、グローバル化とか技術革新というのは基本的には社会的利便性を高めるために人類が頑張って追究してきたことであって、本来それは人類の幸福度を高めるものであるという、当たり前を見失わないようにしないとイケません。私たちが子どもたちにメッセージを伝えるとき、変に脅威論とか悲観論ばかりが伝わらないように気をつけたいと思っています。

それから未来学です。私が台湾で研究滞在をしていたときに出会った学問です。珍しい学問だなと思って、その研究者に「未来学とは、将来予測の学問ですか」と聞いてみたところ、「未来学というのは未来予測もするけど、それは半分。残りの半分は、自分が考えるこうあるべき未来の姿、希望の側面をもって半々で考えるものだ。それを実現するための政策を考えるものだ」と教えてもらいました。私が出会ったこの未

R 今と未来をどうとらえるか

- ・急速な社会変化は希望か？脅威か？
 - ・グローバル化・技術革新はどこへ
 - ・社会的利便性を高め、人類の幸福度を高めるものであるという前提
- ・「未来学」の視点から：
 - ・予測+希望の半々で考える

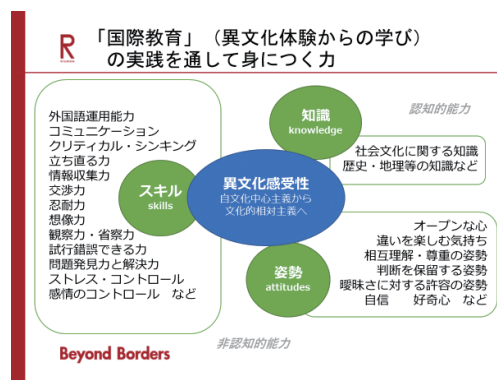
「どうなるか」に振り回されるのではなく、
「どういう世の中にしたいのか」という意志を

Beyond Borders



来学研究所は、面白いことに、教育学の中に位置付けられていたんですね。人材育成において、予測と希望の半々をちゃんともつべきということ。つまり、社会がどうなっていくかに振り回されるのではなく、どういう世の中にしたいのかという軸をしっかりとって社会を作っていくことが重要であるという考え方がベースにあります。それはグローバル教育においても一番大事な観点だと思っています。

国際教育と言葉はざっくりしていて、他にいい言葉はないのかなと思いつつ日々やっているんですけども、とりあえずここでは、国際教育とは異文化体験を通じての学び、異文化に対する学びの実践ということとして、その中で身に付く力を分類したのが、こちらの表になります。全体を、知識とスキルと姿勢という風に分けることができます。知識習



得の部分、世界中の様々な社会文化、歴史、地理に関する知識を得るということとはよくされていることですが、異文化体験を通じて学ぶことによって、むしろ、左側にあるようなスキルや姿勢を身につけることができます。この中にはいくつか、例えば立ち直る力、最近の言葉でレジリエンスと言われますけれども、これからの社会を生き抜くために重要だと言われている非認知的能力もこのリストの中に入っています。右下は姿勢ということで、オープンな心、判断を保留する姿勢や曖昧さに対する許容の姿勢など、変化の激しい世の中を生き抜くために有用な姿勢というものも、国際教育を通じて身につくのではないかと分析をしています。

そして、これらをつなぐ概念として、「異文化感受性」があります。異文化感受性は、知識・スキル・姿勢の三位一体での成長をもって、自文化中心主義から文化的相対主義へ転じていく、そのために必要な力になります。これを今から説明をします。

まず、異文化感受性育成論のベースにある自文化中心主義とは何かということからお話しします。いろんな定義がある中で、Bennettの定義を例に取りますと、「『私たちのやり方が一番よい・正しい』と信じ、全ての物事を自分の基準で判断・評価する心理的状态」となります。これは、すごく独りよがりでもがままな、自分勝手な態度のようにも見えますが、そういう事ではありません。人間は基本、全員ここから始まると私は思っています。なぜかという私たちは、みんな生まれ育った社会に適合していくために、例えば親や教員に言われたことを守って、この社会において「正しい」人間になろうとするし、暗黙のプレッシャーの中でそのような社会化が進むということがあります。

ただし、自分の当たり前が通用しない、異なる価値観の中で、折り合いをつけて何かを達成するために、協力関係の中で新しい価値を創造していくためには、この自文化中心主義を意識的に乗り越えて、新たなスキルを身につけていかなければいけないということになります。右側の絵は、ネット上で拾ってきたものなんですけど、一人の人は6だと、もう一人の人は9だと言ってますね。どちらも正しいです。下に書いてある「あなたが正しいからと言って、私が間違っているわけではない。あなたはただ私の側から世の中を見たことがないだけだ」って言ってます。こういうコンフリクト、世の中にもものすごく多いですよ。しかし、国際教育を通して異文化感受性を獲得することで、私にはこれは9に見えるけれども、きっとあの人から見たら6なんだろうなってことが想像できるようになります。それは想像力でもあるし、知識でもあると思います。異文化感受性を高めることで、きっとこの文化の人から見たらこれは6に見える。私にはここから9に見える。じゃあ6と9がぶつかったときに、どんな問題が生じるんだろうか。そういったことも考えることができ、問題解決の行動に移せると、非常に異文化感受性が高いということになります。

では、ここでいう「文化」をどう捉えるのが良いのでしょうか。文化を学ぶ、異文化を学ぶというときに、1つの視点として、見える部分と見えない部分に分けて考えるというやり方があります。これは中学生や小学校5年生にも紹介してみましたが、通じました。

これは「文化の氷山モデル」というものになります。文化の見える部分は何かという、芸術であったり音楽であったり、建築、食べ物、服、行動様式、いわゆる伝統的な、なんらかの形をもったものですね。英語では大文字で始まる“Culture”と書きました。そして、その見える部分というのは、水面下で見えない大きな部分によって支えられています。見えない部分は、考え方や価値観、前提条件、信じているものなどです。こういったものは、異文化に接したときに、すぐに具体的に見ることはできませんよね。私たちは、異文化の見える部分だけで反応したり、判断したりしてしまいがちですが、本当

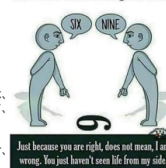
R 異文化感受性の育成：自文化中心主義を乗り越える

自文化中心主義 (Ethnocentrism) とは？

『『私たちのやり方が一番よい・正しい』と信じ、全ての物事を自分の基準で判断・評価する心理的状态』(Bennett 1993)

- ・ 生まれ育った社会に「適合」していくためには、誰もがこの傾向を持たざるを得ない。人として、自然な状態。
- ・ 異なる価値観の間でどのように折り合いをつけ、協力関係の中で新しい価値を創造していくか？

This is one of the realst things I've read...



Beyond Borders

Bennett, M.J. (1993). Towards Ethnorelativism: A Developmental Model of Intercultural Sensitivity. In R.M. Paige (ed.), Education for the Intercultural Experiences (pp.21-71). Yarmouth, ME: Intercultural Press.

R 「文化とは、氷山のようなものである」

見える部分 “Culture”

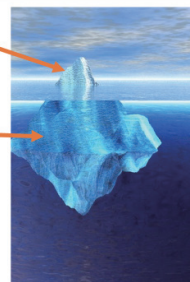
芸術、音楽、建築、食べ物、服、行動様式 など

見えない部分 “culture”

考え方、価値観、前提条件、など

見えない部分への気づき

Beyond Borders



に異文化を理解するという事は、この見えない部分にどれだけ気づけるかということになります。この姿勢が、異文化感受性を高める最初の出発点になります。なので、私は小学生も中学生も高校生にも、海外研修に行く前に、機会があれば最低限このことだけは話をするようにしています。例えば2週間オーストラリアでホームステイするとき、見える部分だけを学ぶのではなくて、見えない部分をどれだけ掘り下げられるかが大事だよ、それを頑張ってくださいと話しています。そして、見えない部分を掘り下げるために必要なことは、ちょっとしたコンフリクトや困ったこと、戸惑い、驚き、といったきっかけを入り口として、「自分のこの戸惑いはどこから来るのか」を客観的に考えて、そのことで現地の人とよくコミュニケーションをとりながら学びを深めてくださいと話しています。



こちらのスライド、これ、なんでしょう。皆さんおそらく、すぐにお箸だとわかると思います。この3つの違いも皆さんわかりますね。日本でこの質問をすると、たいていの方が、下は日本のお箸、右上はおそらく韓国のお箸とスプーンのセット、左は中華系じゃないですかと、結構簡単に答えが出てきます。これ同じ質問を、一度アイルランドでの学会発表の時にしてみたことがあります。これはお箸ですと。違いはわかりません。まあ、スプーンが一個ありますね、という風になります。それ以上の情報は出てきません。要するに、アイルランドの人にとってはお箸というものがそれほど生活の中で重要ではなく、お箸のちょっとした違いということに全く意味がないので、その違いを認知ができないということです。私たちにとっては、ちょっとしたこの先の尖り具合であったりとか素材の違いであったり形の違いであったり、そういうことを敏感に認知することができます。

文化を知るということもこれと同じです。もう1つの説明として、自文化中心主義とは「新しい情報は、すでに知っている情報との関連でしか認識・理解できないという、人間の特徴」であると言われています。つまり私たちの頭の中にはもう「この情報がきたらこういう風に理解しますよ」と枠組みができてしまっているの、自分と違う考え方や自分と全く違う

R 「自文化中心主義」のもう一つの見方

自文化中心主義 (Ethnocentrism) とは？

「新しい情報は、すでに知っている情報との関連でしか認識・理解できないという、人間の特徵」(Mestenhauser 1976)

- ・ 新しい考え方・価値観に気づき、理解するには、一定の時間と経験が必要 (わかった気になると、そこで学びが停止してしまう)
- ・ 頭 (理解) ・ 心 (感情) ・ 身体 (行動) のすべてが関係する

Mestenhauser, J.A. (1976). Learning with foreign students. Minneapolis, MN: North Central Publishing Company.

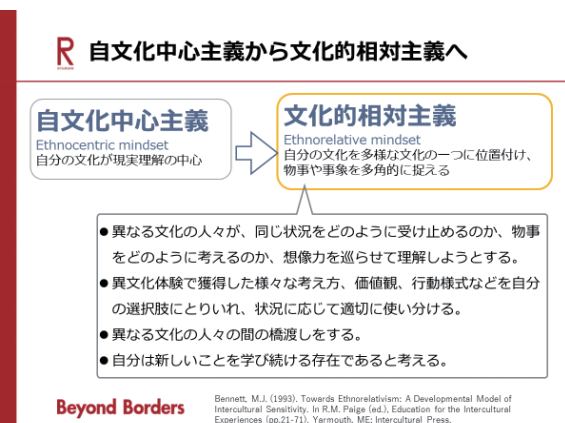
Beyond Borders

価値観に出会った時に、それを認識することすらできないということなんですね。なので、新しい考え方や価値観に気づき理解するには、一定の時間とその状況に対する直接的な経験が必要になります。わかった気になったらそこで学びが終わってしまうということでもあります。「いや、私今わかった気になったけど本当はわかってないんじゃない？私に見えてないものがあるんじゃない？氷山の下にまだ何か隠れてない？」と考えることが、異文化理解では非常に重要になります。また、異文化感受性の育成には頭と心と身体 of 全てが関係します。そういう事情から、異文化感受性の育成には時間がかかるんですね。時間をかけて、しっかりと仕組みをもって育成していくということが必要なので、それだからこそやっぱり学校という場での実践が大事だと考えています。

次に、自文化中心主義を乗り越えたら何があるのかということで、文化的相対主義という概念を紹介します。文化的相対主義では、自分の文化を多様な文化の一つに位置付けて、物事や事象を多角的に捉えます。ここで何が出来るようになるかという、まず1点目は、異なる文化の人々が同じ状況をどのように受け止めるのか、物事をどのように考えるか、想像力を巡らせて理解しようことができます。さっきの9と6の例と同じですね。私には9に見えるけどあの人には6に見えるんだらうなということがわかる力です。

また、異文化体験を繰り返すなかで、そこで理解した様々な考え方、価値観、行動様式などを自分の選択肢に取り入れることができます。要するに、異文化環境で直接見て理解した新たなやり方を、自分もやってみる。自分の中に行動様式のレパートリーが増えるようなイメージです。さらには、そういったことができるようになると、異なる文化の人々の間の橋渡しができるようになります。異文化感受性が高まると、人は気づいてないけど私だけが気づいている文化間のコンフリクト、みたいな状況がどんどん増えていきます。そこに気がつけば橋渡しをすることができます。

さらに、最後の点として、自分は新しいことを学び続ける存在であると考えて、というのがあります。私はこれが一番大事なことだと思っています。異なる文化環境で、新たな人と出会って学ぶ中で、自分が知っていることには限りがあって、自分にはまだまだ知らなきゃいけないことがたくさんあるということを謙虚に受け止め、学



び続けるということがこの文化的相対主義のベースにあります。そのため、自分は今もずっとこれからも学び続ける存在だと考え、さらにはそういった自己成長力に対する肯定感みたいなものもついてくるということです。

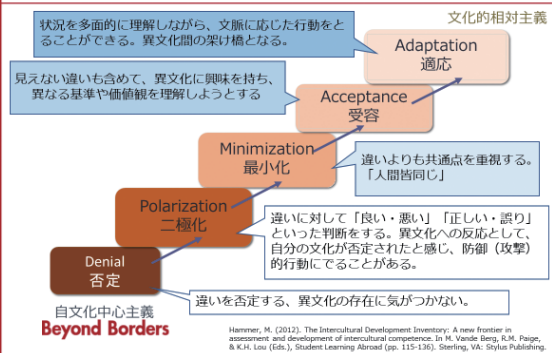
次のスライドでは、異文化感受性発達モデルを紹介しま

す。自文化中心主義から文化的相対主義までを一足飛びに行くのは難しいことなので、段階を追ってその発達を考えましょうというのがこの異文化感受性発達モデルということになります。興味のある方は細かくみていただければと思うのですが、違いを否定する異文化の存在に気がつかない「否定」という段階から始まり、私たちとあの人たちという差異の意識から「あの人たちは間違っていて、私たちが正しい」「私たちがの方が効率が良くてあの人たちは効率が悪い」「私たちは清潔だけであの人たち不潔」みたいな判断をする「二極化」という段階が2番目にきます。

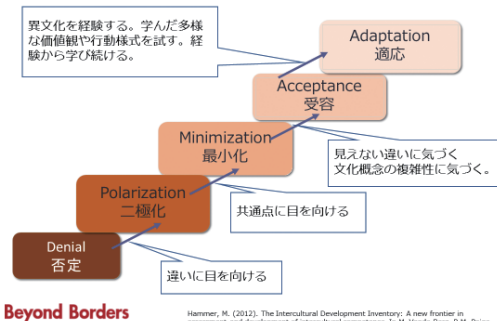
ここからさらに登ると、「最小化」という段階にきます。この段階では、違いよりも共通点を重視するようになり、お互いに皆同じ人間なんだから理解し合えるはずと考え、相手に対しても非常にフレンドリーな姿勢を示すようになります。しかし、この「最小化」の問題は、「人間皆同じ」というときの基準が「私」にあるということ、つまり、あの方は「私」と同じ人間であると考えるので、相手の見えない部分に対する気づきがないということになります。世界中の方は、きっと私と同じ人間であろうという、「文化の氷山モデル」でいうところの「見えない文化」を全く無視してしまっているのが、この「最小化」ということになります。

そしてもう一つ上に行くと、そこでは、「氷山」の下にこんなに大きな未知の部分があることに気づき、見えない違いも含めて異文化を学ぶことに興味を持ち、異なる基準や価値観を理解しようとする段階の「受容」に行きます。こうなると、自主的な探究が始まっていくわけで

R 異文化感受性発達モデル



R 異文化感受性発達モデル：段階ごとに異なる学びのねらい



す。もっと知りたい、もっと勉強したい、もっといろんな国を見てみたい、いろんな人と出会いたい、ということで、行動につながっていきます。

最後「適応」では、先ほど申し上げた文化的相対主義の力がどんどん身につくということになります。

この段階を登るためには、段階によって異なる学習課題をクリアしていく必要があります。段階によって異なる、という点がポイントです。例えば、最初の「否定」から「二極化」に上がる時には、まず文化の違いに目を向けてもらわないといけません。ただ、「二極化」の人に対して違いに目を向けさせ続けると、「二極化」がさらに強化されてしまうので、今度は共通点に目をむけてもらわないといけません。そこで、今度は共通点に目を向ける。そして「最小化」段階に上がったなら、ここでもまた共通点に目を向け続けさせると「最小化」が強化されてしまうので、今度は見えない違いに目を向けさせる。文化っていうのは複雑なものだよね、人間に与える影響は本当に複雑だよねということを理解させることで、「受容」に導きます。

同じ教室で生徒のグループを対象に国際教育の何らかの学びを行うとしても、子どもによって「二極化」の子もいれば「最小化」の子もいれば「受容」の子もいるわけですね。生徒のレベル感を一定理解した上で、学びの終点をどこに持っていくのかを考えることが大切ですが、これを一種類にまとめることは先ほど説明した理由から危険でもあります。いくつかの学習課題を意識的に混ぜる必要性については、考えておいたほうが良いと思います。

「受容」までいくと、もう自ずとどんどん学んでいきます。学んだ多様な価値観や行動様式を試す経験から学び続けるということを自主的にやってきます。1つ重要なポイントとしては、海外留学や海外研修などにおいて、異文化での学びの効果を高めるためには、事前学習を通じて学習者を「受容」レベルに引き上げておくことが最も理想的です。最低限「最小化」レベルにあることは必須と思います。異文化での学び

の効果が非常に高まる上に、危機管理能力も高まります。

では、ここから立命館小中高における国際教育の実践例についてお話ししていきます。ここまでご紹介した様々な概念や理論をどのように実践しているかというのがこれからの話になります。ま

R 国際教育の意義とは？（立小国際教育バンフより）

「かわいい子には旅をさせよ」とは、国際教育の本質的な価値を物語っています。新しい文化に触れる、つまり、自分の当たり前とは異なる価値観、考え方、行動様式、コミュニケーションのあり方を直接体験することは、驚きやとまどい、つまづき、時には怒りや悔しさといった感情を伴うものでもあります。それは、海外旅行で経験できるような楽しい異文化体験のレベルではとどまらず、社会の成り立ちや人のアイデンティティなどについて深く考えるきっかけとなります。つまり、**学びの多い異文化体験には、「ちよつと辛くてめんどろくさい」要素が欠かせない、ということでもあります。**

・・・（中略）・・・

多様性に関かれた人権感覚と感性をもち、グローバル社会で自立した個人として幸福をもって歩んでいけること。そういった素養を身につけるため、立命館小学校の子どもたちには、心が柔軟なうちに多様な文化・社会に触れ、間違いを恐れずにいるいる人とコミュニケーションをとり、**自らの経験から謙虚に学ぶことを通じ**、自分らしさを輝かせていってほしいと思います。

Beyond Borders

ず立命館小学校の国際教育のパンフレットで書いた、私の挨拶の一部をここで抜粋しています。立命館小学校では、学校内での国際教育は1年生から行いますが、海外留学や海外研修は4年生から、有志の児童を対象に始まります。この挨拶では、「学びの多い異文化体験には、『ちょっと辛くてめんどくさい』要素が欠かせない」ということを書きました。保護者の方の一般的な観点からすれば、海外研修に子どもを送ると英語力向上や、海外に目が開く良いきっかけになるだろう、という期待があります。それはその通りなんですけれども、楽しかっただけで終わる海外研修では、次の成長につながる学びという意味ではあんまり価値がないかもしれませんねということです。そのことを先に理解しておいてほしいと思っています。辛くて面倒くさいような出来事というのは、異文化体験では必ず起こることで、それがネガティブに転じるとただのクレームになって戻ってきます。これは学びと成長を促す観点からは意味のないことなので、もしも、帰国後に子どもが、研修中にこれが辛かった、面倒だった、寂しかった、というようなことをご家庭で言ったら、まず、それはいい経験をしたね、とってほしいんです。

小学校では、World Weekというのを毎年やっています。立命館アジア太平洋大学は、全校学生の半分が国際生、半分が国内生です。この国際生を毎年40名ほど招聘しまして、1週間京都に滞在してもらって、1年生から6年生までのすべてのクラスに入ってもらい、教育活動に関わってもらいます。スリランカやインド、タイ、ネパール、ミャンマー、中国、韓国、モンゴル、インドネシア、ウズベキスタンなど、14カ国ぐらいの国際生が参加してくれています。World Weekに関わる教育活動はすべて英語でやりますが、国際生の出身が多様なので、英語も多様です。そのことを子ども達にわかって欲しいですね。いわゆるネイティブ的な英語を学ぶのではなく、世界中ではいろんな人がいろんな形で英語を使っているということ、グローバルなコミュニケーションツールとして自分の英語力を高めていくということ、普通のこととして受け止めてほしいと考えています。子どもたちは本当にこの国際生たちのことが大好きです。1週間の一部を、児童の家でホームステイしてもらおうということも



あって、自然と個人的な友好関係が結ばれて長く続いていくということもあります。毎年やっているのので、1年生から6年生まで6回このことを経験します。

中学生での例として、オーストラリア・アデレード研修を紹介します。先ほどちょっと例で話した2週間のホームステイです。他の海外研修プログラムとは異なり、これは全員が対象です。積極的に行きたい子、行きたくない子、関係なしで、全員が行きます。現地では240人が16校に別れて、一人一家庭でのホームステイをします。中学校3年生なので、こんなに長く家から出ること子どもにとっても親にとっても初めてということがあります。事前に保護者の方とお話した時、「こんなこと初めてなんで、とても心配なんです」と言われるので、「お子さんはきっと大丈夫ですよ。現地ではみんな楽しそうにしていますよ。」と伝えたら、「いや、息子は平気だと思いますけど、私がこんなに長く息子と離れたことがないから、自分が心配なんです」と。中学校3年生というタイミングで行うこの研修は、親離れ子離れの意識を高める上でも非常に重要だと考えています。

私たちがこだわっているのは、ただ2週間行かせるのではなく、約半年以上かけて事前研修をやっています。その中で先ほどのような異文化感受性や氷山の話なども含め、2週間の間で自分たちがどう成長したいのかということを考えさせます。これは、学びの効果を高めるだけでなく、現地での危機管理能力というか、問題対応力を高めることもできているということを感じます。現地の方に聞いたのですが、通常のホームステイでは、約2割の子がステイ先をチェンジして欲しいということ言うらしいんですけど、うちの生徒は240人いても、ステイ先を変えてほしいと言ってくる生徒は稀です。多少の居心地の悪さは、まずは学びのチャンスと受け止めさせること、それを通じて自分を成長させる意識をもたせることを重視しています。

立命館中高では、年間で海外派遣766人、受け入れが377人となっていて、かなり大きな規模でやっていることがわかります。中高生全部合わせて1900人なので、結構高い割合だと思います。

中でもちょっと特徴的なものをご紹介しますと、まず「理系×国際教育」があります。本校はスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）の学校として、SSH初年度



にあたる2002年から5期連続で指定をいただいております。1期から5期まで指定を受けた学校は日本に2校しかないそうです。本校としてはこの5期を通じて、一貫して国際理系人材の育成を重視してやってきました。もちろん理科系の学びも重視していますが、合わせて英語力や多文化協働力の育成ということも同時に進めてきました。

その中で、海外協定校の生徒との共同研究というものをずっと押し進めてきています。例えば、本校生徒2名と台湾の生徒2名が組んで、1年間かけて問題の設定からデータ収集、実験、分析、発表に至るまでオンラインと対面を繰り返して取り組む、ということをやっています。それを通じて生徒たちは本当に大きく成長しています。写真はそれぞれサイエンスフェアに出たときの写真になります。

また、Japan Super Science Fair (JSSF) をこの間18回18年に渡って開催をしてきました。Japan Super Science Fairでは、立命館高校がホストとなって、海外校から生徒と先生を約200人招聘し、1週間に渡って滞在してもらいます。左上の写真、これは学校の中なんですけど、こうやってお互いの研究発表をポスターセッションとして行ったり、本格的な口頭発表を行ったり、右下の写真のように世界中の子とチームを組んでワークショップを行ったりします。

右半分は、これはこの期間中毎日発行しているニューズレターです。真ん中にあるえんじのジャケットを着た子がこのときの生徒の実行委員長でした。このイベントは基本的にすべて生徒が仕切って運営しますので、その運営を行うというプロセスの中でかなり力をつけています。世界中から来た生徒たちがいかに有意義な時間を過ごせるか、そのことにみんな心を砕いて準備をします。

それから文社系でいきますと、スーパー・グローバル・ハイスクール事業への採択を契機に設置したGLOBAL LEARNINGコースというのがありまして、ここではグローバルな社会問題に対して、当事者としてどう行動していくのか、ということを経験の軸としています。多様な国内外の研修のほか、模擬国連等もやっています。SDGsは一つ大きな学びの軸になっています。



Rits Super Global Forumは、先ほどのJapan Super Science Fairの文社版にあたります。1週間海外生を招いて、グローバルな社会課題についてのディスカッションを徹底的に行います。今年は「COVID-19と社会課題」というテーマでした。今年は、JSSFもRSGFもどちらも生徒の実行委員会がオンラインで行うことを決め、新しい形でやり切りました。

これは2018年のRSGFの際、生徒が作ったキャンパスSDGsです。SDGsの17のゴールを立命館中高の文脈で翻訳するとしたらどんなことが言えるか、生徒たちが自分たちの言葉でSDGsを解釈した言葉です。私は特に、この16番の「平和と公正をすべての人に」という目標を「自分の正しさだけを信じないで！」と翻訳したのはすごく面白いなと思いました。一つ一つ本当によく考えて作ったなと思います。生徒たちはこれをポスターにして学校中に貼ってくれました。

SDGsに関わっての研修として、バリ島研修がありました。バリ島には、ワイゼン姉妹という、プラスチックゴミを減らすための“BYE BYE PLASTIC BAGS”という活動を始めた姉妹がいます。そのワイゼン姉妹に話を聞くということで、バリ島にきました。現地を見て、話を直接聞いて、刺激を受けた生徒たちが、BBPBの許可をもらって、BBPB京都支部を立ち上げました。今は高校を卒業して立命館大学の学生になり、この活動を着実に進めているところです。『東洋経済』のSDGsに取り組む小中高特集の中で、本校の実践について、小学校と中高それぞれ取り上げていただいています。宜しかったらぜひご覧ください。



最後のスライドになります。今年は新型コロナ禍のために、学校現場はどれも本当に大変だったと思います。新型コロナ禍のなかにあっても学校の活動を続けていくために、本校でも新しいことにたくさん挑戦しました。そこで新しい成果も見えたという意味では、学びの多い、意義深い年だったとも思っています。その中で、国際教育に関わって考えた

R 最後に:ポストコロナの国際教育実践

1. 国際教育実践を通して育もうとしてきたスキルや姿勢は、新型コロナ禍による急激な社会変化を乗り越えるために役立っている。
 - ・ あらゆる経験を成長に変える力
 - ・ 柔軟性・適応力・創造性・不確実性への耐性など
 - ・ 自文化中心主義に引っぱられない姿勢
2. 国際移動はなくても、国際教育の学びは続けられる
 - ・ 「異文化感受性育成」学びのメカニズムの本質を押さえる
 - ・ ICTスキルによって、可能性を拡大
3. 教職員の力量向上（成長を続けるロールモデルとして）
 - ・ 「異文化感受性」と「ICTスキル」
 - ・ 「私たちは誰も経験していない」未来の世の中を生きていく子どもを育てているという意識

Beyond Borders

ことを3点、最後に挙げておきたいと思います。

1点目は、これまでも国際教育実践を通して育もうとしてきたスキルや姿勢は、新型コロナ禍による急激な社会変化を乗り越えるために役立っているなという気づきがありました。この新型コロナ禍に対応するってことは、つまり、日々新しい価値観、ニューノーマルとも言われますけれども、新しい生活様式、新しい考え方、新しい人間関係の作り方というものに急激に対応しなければいけないということです。これは、国際教育、異文化教育でやろうとしてきた、自分の当たり前が通用しない場所に身をおいて、そこでのあらゆる経験から学び、成長に変えていく、そういう力が必要となっているということでもあります。それから柔軟性、適応力、創造性、不確実性への耐性などそういったものが問われる状況にもあります。そういったスキルや姿勢をもっていることが自分自身を助ける、そういう時代なんだと思っています。

さらには、新型コロナ禍への社会の反応として、様々な差別的な言動が見られました。私の観点からすると、これはモラルの問題ということだけではなくて、人間のもとももっている自文化中心主義的な心理がグッと人間を引っ張ってしまったということだとも解釈できます。不安や恐怖心から自文化中心主義に引っ張られない意識をもつことが、とりわけ重要な世の中になったのではないかと考えています。

それから2番目です。国際移動はなくても、国際教育の学びは続けられると一応書きました。先ほどのJapan Super Science FairもRits Super Global Forumも、生徒が1年前から実行委員会を立ち上げて計画をします。今年はどうするのか、生徒がどのような話し合いをしてくるかなと思って見ていたら、オンラインでやります、オンラインだからこそできることをやりますと、早々に4月ごろに言ってきて、素晴らしいことだと思いました。学校としてもその決断を全面的にサポートしたわけですが、これも、生徒たちに一定のICTスキルがあるということが大きかったと思います。今は、ICTスキルの有無が国際教育の学びと直結する時代になっていると感じます。生徒たちは、様々なインターネット上の道具立てを活用して、見事にやり遂げました。私は、生徒たちのICTスキルを習得する速さに感銘を受けました。私はその流れを邪魔しないように気をつけないと、とっていました。

オンラインであっても、オンサイトであっても、いずれにしても学びのメカニズム、異文化感受性をどう育成するかという理論的な軸をちゃんともってすれば、なんらかの学びを促すことができます。本質を押さえるということが非常に重要です。

最後に、教職員の力量向上、これは常に大事なことだと思います。こういう時代だからこそ、この新型コロナ禍に立ち向かっていく中で成長を続けるロールモデルとして大人の姿を見せていくことがますます大事になってきました。その中で、とりわけ、異文化感受性とICTスキルの面で、私たち大人が常に向上し続けなければいけないと感じます。また、「未来の世の中を生きていく子ども達」を育てているという意識が、ますます大事だと思います。小学生中学生高校生の子どもたちが10年後20年後

に生きてく世の中のことを、私たちは誰も経験していません。その頃の世の中について、何も確証をもったことは言えません。ですから、彼らが自分たちの目で見ている世の中のあり方を、一定信頼していく必要があると思います。私たちの目には、過去の経験によって一定バイアスがかかっているという気付きも必要です。未来の世の中を生きていく子ども達を育てているということについて、常に謙虚さをもっておきたいと思います。

お時間になりましたので、私の話はここで終了とさせていただきます。

質疑応答

司会：

堀江先生ありがとうございました。社会が大きく変化してする、またグローバル化する中で価値創造をどのようにして具体化していくか、わかりやすく立命館の小中高の実践も含めてお話しいただきました。それでは短時間ですけれども、多少質疑応答の時間をとることができますので、質問がある方まずチャットに簡単に質問内容を書いていただけますでしょうか？その上でこちらとやりとりをしたいと思います。

堀江：

ご質問ありがとうございます。一つ目の質問は、「一貫教育には様々なメリットデメリットがあると思いますが、どのように考えですか」ということですね。ありがとうございます。

まず本校の一貫教育の特徴を説明しておきます。ざっくりとした数字ですが、小学生は一学年120人、中学生になると外部入学と合流して倍の240人、高校でさらに360人となります。そういう形で学年あたりの生徒が増えていき、同じクラスで学びますので、同じ子たちがずっと同じコミュニティで12年間学ぶ形ではありません。

一貫教育の大きなメリットの一つは、受験勉強に学びが遮られないことが大きいと思っています。本校の高校生は、大体75%くらいが立命館大学に内部進学していきます。受験勉強が必要ないので、そこに費やさなければいけない時間をすべて、自分のプロジェクトや研究、海外研修、ボランティア、スポーツ、文芸活動など、様々なことに存分に注力することができます。そのことが、自己肯定感に裏打ちされた自己成長力の育成につながっていると思っています。

もう1つのメリットは、小中高含めて、子どもの成長を長い目で見られるということです。小学校だけで見ると、もちろん6年生までで成長著しい子もいますけど、6年生までではなかなか目が出ない子もいます。そういう子が中3で急に伸びたり、小中と地味にやってきたけど高2で急にポーンと伸びる子、いろんな成長のタイミング

とパターンがあることがわかってきました。卒業時に一定の評価が下されるのではなく、成績はもちろんつきますけれども、教員の姿勢として、一人一人の児童・生徒の成長を長い目でみるという事、焦らず、高2くらいで目が出たらいいよねぐらいの、ゆったりした気持ちで見守ることも、子どもによっては必要だと感じています。

ただ最初に申し上げたように、うちは中学で高校のそれぞれのタイミングで、外部からも生徒が入学してきます。このこともすごく私はいいなと思っています。というのも、小学校を卒業して、中学生になったら、新しい自分に切り替えたい部分ってあると思うんですね。発達段階的に。その時に、同じ仲間たちの狭いコミュニティにいると、やっぱちょっと辛いものがあります。外から来た子たちと混ざりながら、お互いの良さを見習い学び合っていく形を意識的に作っているところです。ご質問ありがとうございました。

堀江：

次の質問は「英語力が欠かせない国際交流を意義あるものにするには英語力が欠かせないと思いますが、もともと英語力がある生徒が入学するのでしょうか?」ですね。小学校入試でも中学入試でも、英語はやってないです。高校入試はもちろん英語のテストはありますが、いわゆる受験英語以外のものは何も要請していません。なので、元々英語力がある生徒が入学するというより、基本的には授業の中で実践的に鍛えています。さきほど紹介したJapan Super Science Fairでは、英語で自分の科学研究のプレゼンをするし、質疑応答もするし、リーダーとしてホスピタリティも発揮するし、ということで、英語運用能力としてはかなり高いレベルで使えていると思いますが、それは「サイエンスイングリッシュ」という授業の効果と言えます。相当実践的かつ高度な内容で、独自の教材も開発しながらやってきました。なので、一言でいうと、先生たちが頑張っていますということになります。

堀江：

次は「海外研修ができない現在の状況ではどのような代替プラン・・・」。これはですね、簡単にお答えすると、行けないものは行けないので、可能な限りオンラインでやっています。協定校との合同学習など、様々な交流をしているということになります。

堀江：

次の質問に行きますと、「中高の教師は理系文系の教師と分かれていますので、それぞれどのような教育をしていくことが重要だと思いますか?」。理系・文系と分かれてしまうことは、もうディシプリン上しようがない面もあると思いますが、SDGsが、理系と文系を結びつける軸になりうると思っています。どんな社会課題も、

理系的な発想と文系的な発想の両方の視点から協働していかないと解決しないものだと思います。文理融合という理想もありますが、専門性との両立が難しいので、課題を軸にした協働みたいなものを、教育の中で推し進めていくことが重要だと思います。

堀江：

最後の質問ですね。「国際教育の取り組みが障がい者理解教育やインクルーシブ教育にプラスの効果をもたらすのではないかと感じながらお話を伺ってありました」。そうですね、まさにその通りですね。「立命館の子ども達がインクルーシブな感覚を持っているというような感じか」。ダイバーシティ&インクルージョンの推進が、学園全体での課題になっています。このダイバーシティ&インクルージョン、その真ん中にエクイティーというのがあると思うんですけども、その概念を教育実践の隅々にこれからもっと浸透させていきたいなと思っています。子どもたちは、小さい子になればなるほど、もともとオープンだしインクルーシブだと思うんです。障がいをもった子どもたちもおりますけれども、それぞれ必要な支援でもって授業に参加しています。みんな普通に受け止めているかと思います。D&I課題の主なターゲットは、大人の方ですね。大人がこれまでの人生で構築してきた偏見や先入観といった心の壁を認識し、取っ払い、全体としてインクルーシブな方向にもっていくことは、ひきつづきの課題と思っています。

司会：

時間の関係でこの辺にしたいと思います。堀江先生、改めてありがとうございます。

堀江：

どうも皆さんありがとうございました。